

〔創立 50 周年記念特別記事〕

流体力学会への期待

国立研究開発法人 理化学研究所

松本洋一郎*

Expectations for The Japan Society of Fluid Mechanics

*Yoichiro Matsumoto, RIKEN

*E-mail for correspondence: yoichiro.matsumoto@riken.jp

1 はじめに

平成 16 年度 (2004 年度) の流体力学会会長を務めさせて頂きました。第 22 代の会長という事になります。

流体力学は、物理・気象・海洋・天文などの理学や、航空・機械・土木・船舶・建築・化学工学などの工学、さらには医学・生物学・農学などにも広く応用されています。異なる分野の研究者間の交流を図るべく、分野横断的な学術組織として、流体懇談会がありましたが、さらに発展して、流体力学会が 1982 年に設立され、ここに至っている訳です。

ここで簡単に、2004 年当時の学術を取り巻く環境について振り返ってみたいと思います。2000 年辺りまで順調に増え続けて来た科学技術予算も伸びが止まり、大学と同様、学会も大きな改革が求められていました。同じような分野の学会が林立、同一の人物が複数の学会で類似の仕事をしており、ある種の効率化が求められるようになっていた訳です。事情は今も変わっていないような気がします。そのような背景の中、流体力学会と数値流体力学会の融合が議論され、2002 年 10 月をもって、流体力学会内部に数値流体力学部門が発足、再編され、1 年半が過ぎた頃でした。また、2004 年 10 月には、戦後の流体力学界を自由闊達に牽引してこられた今井功先生が亡くなられた年でもありました。流体力学・学術研究のあり方の転換点であったかも知れません。

20 期の吉澤会長は、両学会の融合に関して「幅広い流体関連分野の包括を目指す流体力学会と、数値流体力学とその産業技術への応用を主目的とする日本数値流体力学会は互いに補完的立場にあります。本会と日本数値流体力学会との融合は異なる目的を持って設立された組織の再編成であり、さらなる発展のための好機と言えます」さらに、「本会は多様な流体现象に関わる研究者、技術者から構成されており、本会以外の学会を主要所属学会としている会員が多々おります。そのような会員が、本会

に所属することの意義は、他分野の流体関連研究者、技術者との交流によって幅広い意見交換を行い、直接の関心対象にとらわれずに議論できること」と分野横断的な学会である本会の特徴と役割について述べています。

21 期の池田会長は本会の財政基盤に言及し、「財政基盤構造に問題点を持っていましたが、昨年度に生じた FDR に対する補助金打ち切りという大きな出来事の中で、その弱点が浮き彫りになって参りました。財政健全化が本会の大きな目標となります」さらに、「理工系学会が有すべき機能は、学術・技術の発展に対する貢献や会員相互の交流機能でしたが、社会の公器としての機能が重要視され、評価・提言・広報・教育機能のような社会に対する直接的貢献が求められる」と財政的自立、学術への貢献に加えて、社会貢献の重要性を強調しています。

そのような状況の中で会長を引き受けた訳ですが、挨拶の中で「流れを物理学や工学の目で捉え、その根底にある自然の仕組みを理解し人類社会に役立てるのが流体力学の主な目的であり」、「流体力学の研究を盛んにすることは、流れに関する未知の自然現象の基本的理解を高めるだけでなく、現実の未解決の問題に大きく貢献する」と改めて本会の設立の趣旨と目的を述べ、「本会の設立の趣旨に勘案しても、広く社会からの要請に勘案しても、学会の財政的自立を達成させ、その機能を充実させ、活性化させて行くことが極めて重要」と申し上げました。

流体力学は、分子・原子スケールから宇宙に至るまで、マルチスケール・マルチフィジックスの現象を取り扱う学問で、まだまだ挑戦する価値のある研究領域を擁しています。新たに生み出されるそれらの成果を核として領域融合型のイノベーションをけん引してほしいと思います。流体力学会は分野横断型の学会として、様々な分野の研究者が活動する場として、大いなる発展が期待されます。また、学問の自律性と自立性を担保する学術団体として発展して行くことを期待しています。何よりも、会員諸氏の益々の活躍をお祈りします。